

田内文枝さん●「社会福祉法人こころの家族」総括施設長

「梅干とキムチのある老人ホーム」を運営

共生の理念であらゆる壁を越える

夫の両親の遺志を継ぎ、日韓にまたがる社会福祉事業を夫婦二人三脚で育てる同志社人。結婚して言葉も文化も知らないまま夫の国に渡り、孤児たちの母となった韓国時代を経て、現在は在日コリアンと日本人が共生する老人ホーム「故郷の家」を夫とともに各地で展開中です。



たうち ふみえ

大阪市生まれ。同志社大学文学部社会学科社会福祉学専攻卒業。社会福祉法人博愛社に勤務後、72年、尹基氏と結婚、渡韓。全羅南道・木浦市にある孤児院「木浦共生園」を中心に、社会福祉事業の発展に心血を注ぐ。82年、一家で日本に帰国。特別養護老人ホーム「故郷の家」（堺市、神戸市、京都市）開設にたずさわる。「社会福祉法人こころの家族」常任理事、事務総長。尹基氏の母は、韓国人伝道師の夫・尹致浩氏が興した共生園で共に働き30年間で3000人の孤児を育て、日本人で初めて韓国政府から文化勳章・国民章を受賞した故・田内千鶴子氏。尹基氏も07年、同格の国民勳章の冬柏章を受けている。こころの家族 <http://www.kokorono.or.jp>

一通の投稿から歩き出した夢

「故郷の家・京都」が今年4月に開設されました。現在の様子をお聞かせください。

田内 竣工式には韓国からも200人以上の方々が来てくださいました。現在は特養100人とケアハウス20床があり、これからショートステイ20床と介護付きケアハウス20床も始めます。入居者は在日コリアンと日本人が半々。私たちの理

想としている割合です。韓国のソーシャルワーカーにも8人、相談員として来ていただいています。韓国の若い方がお世話をしてくださるということで、在日のお年寄りは心を開いてくださるんですね。韓国人はお年寄りをとてども大事にします。それを日本人の若いスタッフが見て、学ぶものがあると思う。

「故郷の家」の歩みについてお聞かせください。

田内 私は結婚して主人の尹基ゆんぎと共に韓国に渡り、尹の両親が興した木浦の共生園という孤児院で10年過ごしました。尹の国籍は日本ですが、生まれ育ちは韓国人そのものです。日本語はできてても日本の文化にまで親しむことは難しかったそうです。そこで韓国で生まれた私たちの娘には日本の文化を教えたいと思い、いったん家族で日本に戻りました。経済発展を遂げた日本に、今度はアジアに向けて手を差し伸べてほしいという思いで、尹と共に東京で活動していた頃

のことで。84年に、在日韓国人のお年寄りが孤独死し、遺骨も福祉事務所のロッカーに置かれたままという事件が報道されました。尹は、なぜ誰も気付かなかったのか、地域との交流はなかったのかと大変胸を痛めました。韓国で亡くなった尹の母、田内千鶴子が臨終の床で「梅干が食べたい」と言ったことも重なったのでしよう。尹は田内千鶴子から「日本や日本人には、こんないいところもあるんだよ」という話を聞いて育ったと言います。何とか日本と韓国が仲良くして、良い方向へ行ってもらいたいという思いが、尹にはずつとあるんですね。そこで朝日新聞の論壇にメッセージを投稿したんです。「日本人の良心を立てましょう」と。こんな悲しい人たちがいる、こんな人たちが安心して暮らせる老人ホームを造ってくださいと。

「反響はいかがでしたか。」

田内 文化人をはじめとして、大きな反響がありました。各界で活躍しておられる方々にもお手紙を出したところ、井上靖さん、森光子さん、森繁久弥さん、柔道の山下泰裕さんなど、500人余りから賛同のお返事をいただき感謝しました。そういう人たちが発起人となり、

「在日韓国老人ホームをつくる会」を結成してくださったんです。

福祉は地域と共に

「そこで最初に堺市に「故郷の家」が誕生したのですね。」

田内 さまざまな困難はありましたが、89年にオープンしました。マスコミも応援してくださり、テレビのドキュメンタリーでも取り上げてくださったのですが、今度は逆に、地元の方にとって敷居の高い施設になってしまった。「堺市大韓民国一みたいなになってしまっ、これは困ったなど。地域福祉があつてこそ施設なので、地域の人を無関心にはいけない。そこで翌年から毎年コリアン・デーを開催して、地域との交流を積み重ね努力しています。韓国の美しいものや美しい音楽は、地域の日本人の方にも喜ばれ、地元にも困窮している日本人のお年寄りがいらつしやるのが分かってきた。そこで地域の日本の方も対象にデイサービスやショートステイを始めました。今では90人の入居者のうち、3割が日本人です。いつも賑やかですよ。日本の正月があり韓国の旧正月がある。昼食は日本食で、夜はチゲや焼肉も出る。

食卓にはいつもキムチがあり、梅干があります。

「神戸の故郷の家は、どのような経緯で生まれたのですか。」

田内 阪神淡路大震災があつた年の春、在日一世のハルモニ（おばあさん）たちが堺に來られて、皆が楽しく過ごしている様子をごらんになった。そして「長田はいま大変なんです」とおっしゃるんですね。家を建て替えることもできず、皆がバラバラになつてほしいと。とは言っても簡単にできることではないので思案している、あるハルモニが訪ねてこられた。「けちけち貯めた5000万円がある。これで長田に建ててください」しかも在日だけが入居するのではなく、「日本人と仲良く暮らせる家」と。これはやらねばならない。心を動かされました。

「今度は地元の反応はいかがでしたか。」

田内 長田にある三ツ星ベルトさんという会社が持つておられた土地を譲っていただき、故郷の家を建てることができました。長田の真野地区は、地域の活動がとて盛んです。オープン以来、この地区の方々の協力が欠かせません。当時、尹が韓国のノーベル賞ともいうべき「ホ

「アム賞」をいただきました。もともと韓国のサムスンという企業が創設した賞です。サムスンは漢字で書けば「三星」。そこで三ツ星ベルトさんがご縁を感じてくださり、何かしたいということで福利厚生施設を土地付きで寄贈してくださいました。この時も、三ツ星ベルトさんが地域の方に「何か有益な使い方はないか」と尋ねると、地域のために使うのなら、社会福祉法人こころの家族に任せれば良いと答えてくださった。京都の故郷の家も、もとは任天堂さんの工場の跡地でした。地域のために貢献していただきたいとお話をしにいき、私たちの活動を認めてくださって土地を譲ってくださいることになった。本当にありがたいことでした。

——地域の理解も得られた中で、日韓のお年寄りが共に暮らす家ができたのは本当に素晴らしいことですね。ただ、「共生」とひと口に言っても現実には困難なことも多いと思います。共生を真に実現させるために重要なことは何でしょうか。

田内 人は、自分がとても大切です。自分が大切のように相手をもっと大切に思わないと、共生はあり得ません。この相互尊重が共生の基本です。男女の差、年

齢の差、人種の違い。これらの違いも相手の立場に立って考えることだと思つていきます。そうすれば一歩、外へ出られる。新しいものが見えてくるのだと思えます。田内千鶴子があれば韓国で評価されたのも、彼女が本当に韓国の子どもたちを愛し、地域のために働いたからだと思います。地域が、自分の周囲が、家族が良くなつてこそ、いろんな国との関係も良くなる。それでこそ「共生」なのだと思います。

同志社が結んだ二人同志社から始まった福祉の道

——ご主人である尹基さんとの出会いについてお聞かせいただけますか。

田内 私が博愛社で働いていた当時、尹は東京で、アジアの支援活動の事務局長をしていました。私たちを結び付けたのは、私が大学のゼミでお世話になった嶋田先生（嶋田啓一郎大学名誉教授）です。嶋田先生がむかし肺結核を患われた時に、当時韓国の社会福祉の第一人者だったキム・ドクチュン先生が輸血用の血を提供してくださいました。そのキム先生の教え子が尹でした。尹はクリスマスチャンだったため私も結婚前に洗礼を受けて、言葉

も文化も歴史も知らないまま韓国へ渡つたんです。

——多くのご苦労があったと思います。

田内 私は「大阪商人」の家に生まれましたが、同志社に入学したことが、私の人生、運命を変えることになったと思います。まず、韓国に行ったとき、嶋田啓一郎先生の偉大さに、韓国でも大変に尊敬されておられることに驚きました。私が嶋田先生の弟子であるということだけで、温かく迎えていただき、親切な歓迎を受けることができました。

人生には、計り知れないものがあると最近はずくづく感じるようになりました。尹と結婚して、韓国に行くこと母に告げたとき、母は、なぜ、韓国まで行かねばならないのか、とさめざめと泣いて、嘆きました。その後、日本に戻つて、尹とともに「故郷の家」をつくり、そこで父親の世話ができました。韓国に行くときには、思つてもみなかつた展開でした。娘として、こんな形で親孝行ができたのは、ありがたいことだと思つていますが、今また、何十年か経つて、スタートの地である京都に戻り、日韓のお年寄りのための「故郷の家・京都」を運営していることが、何か、夢を見ているような

感じがしています。

——再びの京都はいかがですか。

田内 京都には、多くの老人ホームがあります。「故郷の家・京都」もそうした施設の一つですが、その意義や歴史性、専門性から大きな特色をもっています。

戦前、朝鮮半島から日本に来て、戦後も帰るに帰れず、日本で暮らしている在日の高齢者がいます。そうした人たちのために、日本に「故郷」を作り、そこで、キムチを食べ、ハンゲルを使い、アリランを歌う——そんな生活・文化を社会福祉サービスに取り入れたことに、大きな意味があると自負しています。

「運命的」といつてしまえば、それまでですが、初志の地である京都に、最終目的に近いものを作れた、これも同志社の力があつたからかな、と感謝しています。

「樹えよ人を 輝け自由」

——同志社時代の思い出を。

田内 社会福祉学を選んだのは、私自身が子どもの頃から消極的な性格だったため、自分と同じような弱い人のためには何ができればと思つたからです。入学後は混声合唱団「こまくさ」に入団。カレ

ッジソングや大学歌が大好きでした。特に大学歌は本当に素晴らしい歌詞であることが、この年齢になると分かります。「樹えよ人を 輝け自由 我等 我等地に生きん」私の人生を振り返ると、大学歌に導かれていると思えるほどです。

——今後の抱負をお願いします。

田内 これからは人を育てることが私に課せられた役割かな、と感じています。このかわりで、福祉を勉強したことに幸せを感じたのは、韓国の社会福祉を勉強した学生たちを対象にした国際社会福祉プログラムです。そのプログラムを「故郷の家」で実践・修了した学生が700人を超えましたが、その子たちが、いま、高齢化社会を迎えた韓国の福祉現場で働いています。

その姿を見ると、本当に嬉しく感じます。京都には同志社もありますし、韓国からの研修生だけでなく、広くアジア全域で共有できる福祉のスタンダードを作るための研修生を受け入れ、指導するシステムの構築をめざしたいと思つています。

「故郷の家・京都」には、当初、留学生ハウスを併設し、お年寄りや若い留学生が共に暮らす、という構想を抱いてい

ました。ただ、いざ始めてみると、社会福祉施設は厚生労働省、留学生の受け入れは文部科学省の管轄です。補助金や支援の流れも異なり難しいものがあります。留学生の実習などは可能ですので、ここでの経験を留学生在が母国に持ち帰つて生かしてもらえたらと期待しています。

——読者へのメッセージをお願いします。

田内 私は同志社大学で、大変なことに遭遇したときでも、真心を尽くし裸になつて自分を省み、進んでいくことを学びました。私自身、同志社にご縁をいただき幸せでしたし、世界中にも素晴らしい働きをされる同志社人がおられます。皆さんもどうぞ同志社に誇りを持ってください。そして留学生を大切にしてきた歴史が守られてうれしいです。

福祉国家は、福祉市民がたくさんいて、はじめてできるものです。お互いに分かち合い、助け合うことです。

故郷の家は、1万円を出す人が3万人いればできるという夢から始まりました。このような運動に、同志社のみならずのご参加をお待ちしています。

（聞き手・當村まり、2009年6月19日、故郷の家・京都にて）

藤原良平さん●日本モンゴル柔道友好協会会長

柔道を通じて日蒙交流

定年後の人生を モンゴルの若者に捧げる

モンゴルに柔道を普及させる支援活動を興して、今年で9年目を迎える藤原さん。72枚の柔道畳から始めた活動は、オリンピックのメダリストの育成にもひと役買いました。人とのつながりと柔道を通じてモンゴルの子どもの夢を育てる、自然体の国際交流について伺いました。



ふじわら りょうへい

1941年、京都市生まれ。64年、同志社大学経済学部卒業。同年、博報堂に入社。総務、営業などを経て01年退職。在職中の68～70年、ベルギーの柔道チームでナショナルコーチ、71から74年、同志社大学柔道部監督を歴任。2001年、「日本・モンゴル友好柔道場（09年「日本・モンゴル柔道友好協会」に改称）」を設立、会長に就任。02年、モンゴル国NPO「モンゴル・日本格闘技振興協会（MJ協会）」を設立し、両国の友好親善、モンゴルにおける柔道の普及・拡大、柔道・格闘技の発展に寄与する。西日本実業柔道連盟常任理事。

<http://www.mongol-judo.jp/>

格差社会の困難を乗り越えて 柔道人口を増やしたい

——まず、モンゴルという国との出会いについてお聞かせください。

藤原 98年、定年間の57歳の時に家族で訪れたのが最初です。司馬遼太郎に憧れていまして、『モンゴル紀行』という作品を読んで、ぜひ行ってみたいと思っていました。

——モンゴルのスポーツ事情を簡単に教えていただけますか。

藤原 一番力の強い人はモンゴル相撲へ、身体の小さい人や中ぐらいの人はレスリングや柔道、もつと小柄な人はボクシングと、やはりモンゴル相撲の国です。から格闘技に人気があります。このように、モンゴル相撲を中心として全国に強力な格闘技クラブが20ほど点在し、さらに小さなクラブがあります。

しかし、モンゴルはいわゆる格差社会なんです。特に民主化されて以来、格差が広がっています。その中で、スポーツができる人とできない人との差も広が

っている。スポーツができるのは、どちらかというと経済的に豊かな人たち。「できない人たち」ができるだけスポーツに取り組めるようにしようというのが、我々の活動のねらいです。

——モンゴルの子どもたちに柔道を教える活動の、そもその動機は何ですか。

藤原 モンゴルは99年から3年続きでひどい冷害に見舞われました。羊が死んで、遊牧民が生活できなくなりました。それで大勢の遊牧民が子どもを連れてウランバートルに集まり、当時ウランバートルの人

口は1年で10万人ずつ増えていききました。街にストリートチルドレンがあふれ、今は少し減りましたがマンホールチルドレンもいた。親も離婚したり死別したりという状況で、子どもたちがまともに生活できない時代だったのです。そこで、子どもたちに柔道をさせたら心が強くなるのでは、冷害で沈んだ心が元気になるのではと。これは中1で柔道を始めた僕の経験から思ったことです。戦後の貧しい時代、親に柔道着だけを買ってもらって始めた柔道で元気になり、自信をもって社会で活躍できるようになった。モンゴルでも同じことができればということ

で、柔道への恩返しのもりで支援を始めた。最初はどうな活動から始められたのですか。

藤原 柔道用の畳を贈りました。柔道仲間とモンゴルへ行ったのが2001年。そこで格闘技の名門「ヒルチンクラブ」など向こうの柔道関係者にお会いして、何か手助けできることはないかと。道場へも行ってみましたが、柔道畳がないんです。他の格闘技と一緒に同じマット

72枚の畳からスタート メダリストの少年時代も支援

——72枚の畳から、交流がどんどん拡大していったのですか。

藤原 同じ年に、交流事業を運営するための現地NPO「モンゴル・日本格闘技振興協会」、通称「MJ協会」を立ち上げました。以来、日本からリサイクル柔道着を寄贈したり、大阪で開かれた世界選手権大会にジュニアチームを招待した

り。その招待選手を選抜するために、03

年にはMJジュニア柔道大会を開催。この時63キロ級で優勝したのが、翌年のアテネ五輪で3位になったツアガンバートル選手です。90キロ級の優勝者ツブシンバヤル選手は北京五輪の100キロ級で優勝して、モンゴル初の金メダリストになりました。嬉しかったですね。04年には同志社大学柔道部の学生を3人連れていき、各地で合同練習や模範試合を行ったことでもあります。

——奨学金制度も始められたのですか。

藤原 04年に正式にスタートしたMJ少年柔道大会の参加選手の中から、特に経済的な事情で困難な状況にある学生を各クラブから推薦していただき、奨学金を支給することにしました。今までもう20人くらいになります。それぞれ月20ドルを本人に渡し、使い道は任せています。返還の義務もありません。モンゴルの物価は日本の約10分の1なので、日本円にして2万円程度の価値でしょうか。授業料は無料ですから、トレーニンングウェアや本の購入などに使っているようです。

ハングリー精神が 優秀な格闘技選手を育てる

——柔道を通じて、モンゴルの子どもたちに最も伝えたいことは何ですか。

藤原 精神的に強くなってくれることで。ただ、日本とモンゴルには稲作と遊牧生活から来る文化の違いがあります。近年言動が何かと物議をかもしているモンゴル人横綱がいますが、彼は遊牧民文化を体現しているんですね。まとめ役ではなく、強いリーダーを必要とする社会ですから。ああ見えて、彼は裏ではいろんな人の面倒を見ているんですよ。だからモンゴル人は彼を尊敬しているんです。

僕が向こうへ行つた時は、そういう文化の違いから始めて柔道の精神を説明します。若い選手たちも礼儀正しくしていますので、柔道精神が徐々に浸透してきただかなど。お年寄りや目上の方を敬う伝統もありますから、柔道に入つていきやすい側面もあるのではないですか。

——モンゴルの柔道にはどんな特徴がありますか。

藤原 まだそこまでの議論には至っていませんが、皆さつちりと柔道の技を学び、一本を取る柔道をしています。その上で、モンゴル相撲にたくさん技があるので、日本発の技ではない、混合的な技もたくさんできています。モンゴル相撲が日本の柔道と決定的に違うのは、畳がなかったこと。畳の上では足がよく滑つてさばけるのでスピードのある足技が使えます

が、草原で行うモンゴル相撲にはそれがない。むしろ、つかまえて担ぎ上げたり肩車をしたりという、上体を使う技が多い。そういうモンゴル相撲がしみついているモンゴル人ならではの柔道のスタイルが、僕はあると思います。北京五輪でツブシンバヤル選手が鈴木桂治選手に勝った技も双手刈（てびかり）でした。つかまえにくい腕力、握力、引き上げる力、そしてスピードがないとできない技です。そういう力は日本人の柔道家より、ずっと強いんです。

——他にモンゴル人が柔道選手として持っている、優れた資質とは何でしょうか。

藤原 ハングリー精神ですね。大自然の厳しさに耐えてきた民族性もあるかもしれません。特に今の20代の若者については最初にお話ししたように、90年に社会主義が崩壊して民主化が進む混乱の中で、彼らの親たちが路頭に迷った。そういう親を見ながら自分も必死で生きてきたのが、今の大相撲で活躍している力士たちの世代です。強い者は相撲へ行きなさい、と。だから彼らは日本へ来て、一生懸命稽古をした。あと10年も経つてウランバートルの子どもたちが日本のように豊かになれば、彼らが大相撲で今と同じような活躍ができるかどうかは分から

ないと思いますよ。それからモンゴルは1500メートルの高原ですから、いながらにして高地訓練ができます。彼らの心肺機能は非常に高い。スタミナでは負けません。社会主義時代から体育教育がしっかり行われてきたこともあって、身体能力は非常に高いです。柔道をしている子供達などはたいていバック転ができますよ。指導者にも立派な方がおられるので、モンゴルの柔道は今後も伸びていくと思います。

柔道の国際化を 間近で目撃した貴重な体験

——学生時代の思い出を。

藤原 2年生までは柔道に熱中していました。62年で全日本ベスト8、63年には関西学生柔道大会で優勝（当時は無差別級）、同年秋には中量級の五輪候補選手にも選ばれました。遊びも大好きで、3年の時には高校時代の友人と一緒に土木作業員のアルバイトをしてお金を貯め、25フィートのヨットを買ったことも。不足分はギオン会館などでジャズコンサートを企画しました。約1年間ヨットの共同オーナーとして琵琶湖で暮らし、ほとんど家に帰りませんでした（笑）。

——でも、卒業後も柔道を続けられた。

藤原 柔道の盛んだつた博報堂に入社しました。数年後に選手をやめて休職し、ベルギーのナショナルコーチに。64年の東京五輪でヘーシンクが優勝して以降、柔道が世界的に広まり、ヨーロッパ各国に日本の柔道家が指導者として招かれた時代でした。彼らのパワーには驚きでしたが、「柔道」が現代の「JUDO」に変化していく様子を目の当たりにしたわけです。

——藤原さんにとって、柔道とは。

藤原 僕の人生のすべてです。30代後半から定年近くまでは柔道から離れていましたが、柔道を通じて出会った多くの仲間が今でも支えられてきました。この活動ができるのも、そうして知り合った250人もの支援者のおかげです。NPO法人にもできると思いますが、お役人に管理されるのがいやなので（笑）。NPOになれば寄付がしやすいという話もありますが、これは最初から個人の厚意で成り立っているもの。それがなくなれば終わりにしようと思っています。

人間関係を紡ぐ コミュニケーションを大切に

——今後の抱負をお聞かせください。

藤原 格差が広がる一方のモンゴル社会

ですが、柔道の底辺は確実に拡大しています。裾野を広げることによって山は高くなりました。その頂点が北京五輪の金メダルです。今年で7回目になるMJ少年柔道大会も参加者がどんどん増えています。最初は63人だったのが昨年は380人。オリンピックで優勝することは、子どもたちに一番夢と勇気を与えることなんです。それに今のモンゴルでは柔道が最もメダルに近い競技なんです。子どもや若者に夢を持ってもらい、精神的に成長してもらおう。引き続き、そのお役に少しでも立てればと思います。

モンゴルは奇跡みたいな国なんです。あれだけの世界制覇を遂げた国が、中国に取り込まれてもがいていたところを、ソビエトに逃げ込んで独立させてもらった。その独立できたところが、今のチベットや新疆ウイグル自治区と違うところなんです。だからモンゴルでは、人々の顔が輝いている。司馬遼太郎も、モンゴルのそういうところが好きだったんじゃないかな。

——読者へメッセージをお願いします。

藤原 人生で重要なのはコミュニケーションです。このつながりは絶対に切つてはダメ。この交流事業も、もとはと言えば、最初にモンゴルを訪れた時に知り合

った通訳の方から始まったこと。ハンダスレンさんという女性ですが、僕たちの帰国後、日本語をもっと学びたいという連絡を受けた。そこで自宅に3カ月間ホームステイしてもらい、奈良の日本語学校に通ってもらいました。そこで「日本は素晴らしい国だ」とほめてくれました。こちららも調子に乗って、また翌年モンゴルへ（笑）。彼女のお宅で大歓迎を受けました。彼女のお兄さんがヒルチンクラブとナショナルチームのレスリングコーチだったので、ヒルチンクラブとの縁はそこからスタートしたんです。ハンダスレンもMJ協会のマネージャーを務めてくれました。

僕は退職後の方が、人脈は広がりました。人生で知り合った人たちを切り捨てることが、すなわち自分が切り捨てられること。人とのつながりからまた新たな関係が生まれ、広がっていく幸せを、どうか大切にしていただきたいと思えます。

（聞き手・當村まり、2009年5月28日 奈良県生駒市）